建学の
精神

大学の使命は、
将来の社会を担って立つ人材の育成

いかなる国家社会においても、大学は最高の研究・教育の機関である。大学の使命は、将来の社会を担って立つ人材の育成にある。

その教育の目標は、高い人格をもち、人倫の道をふみはずすことなく、社会的義務を立派に果たし得る人をつくることであり、しかもその職域が国内であろうと海外であろうと、その如何を問わず、全世界の人々から尊敬される日本人として、全人類の平和と幸福のために寄与する精神をもった人間を育成することである。

このような人間は、日本古来の美しい道徳的伝統を精神的基盤とし、東西両洋の豊かな文化教養を身につけ、絶えず変動する国内情勢に関して十分な知識をもち、その科学的分析によって正しい情勢判断のできる能力を備え、如何なる時局に当面しても、常に独自の見解を堅持し自己の信念を貫き得る人間である。かかる学生の育成が、本学の建学の精神である。

創設者・初代総長
荒木俊馬

本学の創設者荒木俊馬は、人々を宇宙に誘う数多くの著書を執筆し、ドイツ留学時代にはアインシュタイン博士から直々に相対性理論を教わった世界的な天文学者です。「教育は人間をつくるものだ」という信念のもと、一貫して"学生のために"という姿勢を貫いた生涯は「建学の精神」「教学の理念」に今もなお息づいています。

むすんで、うみだす。
京都産業大学
KYOTO SANGYO UNIVERSITY

令和６年度

入　学　式

４月２日　午前10時
　　午後１時
　　午後３時30分

４月３日　午前10時
　　午後１時
　　午後３時30分

京都産業大學

式次第

開式の辞
国歌斉唱
学長告辞
入学生宣誓
学歌斉唱
閉式の辞

以上

京都産業大学学歌

荒木俊馬　作詞
團伊玖磨　作曲

一、天地の　闢けし時ゆ
神々の　鎮まりませる
神山の　その本山に
産業　学び勤はく
遥しき　われら若人
次の代の　わが日の本を
担いて立たむ

二、天雲の　向伏す極み
谷蟆の　さ渡る極み
有りと有る　全人類の
幸福と　平和の為に
わが命　捧げて惜いぬ
現身の　形造りに
われら励まむ

三、鋼鉄なす　身体を錬え
黄金なす　精神を磨き
新珠の　真理を窮め
剛健の　意気高らかに
天翔る　希望抱きて
五大洲　七つの洋に
雄飛し行かむ

京都産業大学の学章は、ギリシャ神話に登場する半身半馬の賢者ケイロンをかたどった星座、サギタリウス（射手座）をあしらい、その下に大学の文字を配している。

広大無辺な大宇宙を自由奔放に駆け巡る星々の姿は、新しい時代に、世界へ雄飛する若者への希望を表している。

京都産業大学学歌語句解説

天地の闢けし時ゆ　天と地とが分れ開けた時から。この世界の始まりの時を表す語句。「ゆ」は「より」の意。「闢」は閉じているものが開く意で「開闢」の熟語を作る。『古事記』の序文に「天地開闢より始めて……」とある。

神山　神の降臨する神聖な山。ここは固有名詞で、上賀茂神社の正面遥か後方に眺められる円錐形の山頂の山。上賀茂神社の御神体山。本学キャンパスからもその姿が北方に美しく望まれる。

本山　本学の所在地名。北区上賀茂本山。

産業　「産業」を古語風に表現したもの。「むすび」は本来は「産霊」で、万物の生じるもとを成す霊的存在。後に「むすび」と濁音化して「産み出す」意となった。

勤はく　「勤ふ」の名詞化。一心につとめはげむこと。万葉集の藤原宮役民の歌に、都を造るための木材を運ぶ民を「…筏に作り　上すらむ勤はく見れば　神ながらならし」と歌っている。

天雲の向伏す極み　谷蟆のさ渡る極み　天の雲が遠く伏したなびいている世界の果て、ひきがえる（谷蟆）が渡ってゆく地の果て、の意。奈良時代にこの語句はよく使われ、祝詞や万葉集の歌にもある。「……この照らす日月の下は　天雲の向伏す極み　谷蟆のさ渡る極み　聞しをす国のまほらと……」（巻五山上憶良の歌）。当時の神話では、ひきがえるは世界の果てまで動きまわり、何でも知っている動物と信じられていた。

わが命捧げて惜いぬ　わが生命をさしあげて後悔しない、惜しいと思わない、の意。作詞者である荒木俊馬先生が「悔いない」と「惜しまない」とを合成して「惜いぬ」とした両義語。

現身の形造り　この世に生きている人間としての身体や精神を作ること。すなわち人作り、人格形成。第三番の歌詞で具体的に述べている。

黄金なす　黄金のような。「なす」は「ような」の古語。「似す」が語源。

新珠の　掘り出したままの、まだ磨いていない玉（宝石）。「真理」の枕詞風に用いたもの。

五大洲　アジア、アフリカ、アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリア。

七つの洋　南と北の太平洋と大西洋、インド洋、北極海、南極海。「五大洲　七つの洋」で地球上の全世界を表す。